雜載

光○柳原爲人數、殿上人等參仕、頃日此戯世間流行、

〔武江年表六〕安永三年、投扇の戯行れ、貴賤是を弄べり、

〔武江年表八〕文政五年、投扇の戯世に行れしが、辻々に見世をかまへ賭をなして、甲乙を爭ひしかば、八月にいたりて停らる、

〔武江年表九〕嘉永二年七月、投扇の戯行はる、大坂よりはやり來れり、投扇は投壺より出て、安永の頃、大坂の人工夫しけるとか、源氏物語五十餘帖の題號により、其名目を定め、甲乙を爭ふ、寛政の頃また天保中にも江戸に行れしなり、

〔海錄十六〕投扇興といふ戯れあり、そは近く安永三年に專ら世にもて興せしより、都鄙あまねくゑらざるものなし、そのころの冊子に、投扇興譜といふ小冊あり、その後また文化十年にも行はる、そのころ投扇興圖式といふ小冊あり、その後また文政にいたりても、予○山崎美成ゑれる中川五兵衛といふもの淺草寺の境内にて、この戯を始たりしが、公より禁ぜられて止みぬ、この間にも猶ありや、さて西川○祐信の繪本の零冊を得たるに、投扇興をもて興ずる圖あり、その書表題なし、紙數を記せし所に世中の字あり、尋ぬべし、祐信の繪ならば享保頃の證とすべし、ゑかる時はその來るも亦ふるしと云べし、

〔投扇式序〕投壺は聖人の翫び、其あらそひは君子也とは、世の知る所にして捨べきにあらねども、易く翫ぶ事かたし、此投扇は兒女小童をして卽席になし易く、酒宴の席に一座の興を催し、勞をやすんじ笑を求む、延氣なる事又類なし、木枕は悠々たる時用るの具なれば、四海太平の時に順じ、扇を披て口に送るは、末廣がりの目出度に基く、又通寶十二字は月の數に表し、何れも祝遊の種なれば、其法を聞まほしく思ひし折から、或人投扇の圖を予にみせしむ、予又是を携て獨考すれども、其意味分明ならず、爰に予と信友の交りを結ぶ秀邦齋といへる人あり、兼てより此業をほの聞て、此業に工夫をこらす折からなれば、直に此圖を秀邦に與ふ、是より彌手練をかんがへ、